

町の面積の9割が森林 北海道北部の下川町から届ける 地域に根ざした広葉樹材

計画的な生産が難しい広葉樹

熟練の林業家が「広葉樹は神様の領域」と呼ぶほど、計画的な生産が難しい広葉樹。広葉樹の森は針葉樹だけで形成される人工林よりも生物多様性に優れ、地球環境にとってなくてはならない生命の営みの場です。そんな広葉樹を舞台に、人間の都合ではなく、森の成り立ちに合わせた木材供給が、2015年、北海道下川町から始まりました。北海道の森林の約7割が広葉樹を主体とした天然林です。人間が植えて管理する針葉樹を主体とした人工林と異なり、広葉樹は人間による管理が難しい領域で、芽生えと成長を自然に任せることがほとんどです。垂直に伸びる針葉樹とは異なり、光を求めて縦横無尽に枝を伸ばす広葉樹の樹形が、まっすぐな丸太を求める人間にとってさらに取り扱いを難しくしています。

広葉樹のほとんどがチップに

計画的な生産が難しい広葉樹も、まったく生産されないわけではありません。国産広葉樹材は年間約300万m³生産されていますが、その用途はパルプ材が約80%と、ほとんどが紙の原料としてチップにされています(平成23年度森林・林業白書)。もちろんパルプ材も大切な資源ですが、なかには高級家具に使える高品質な木材も、チップにされてしまっているのが現状です。

運送コスト削減が大きな課題

このような状況を生み出している背景には、木材の運送コストの問題があります。一般に、森から伐り出された広葉樹丸太は、大量に生まれる安価なパルプ原料になる丸太(パルプ材)と、高値で取り引きされる少量の優良な丸太に分けられます。丸太は原木車と呼ばれる巨大な運搬車で運ばれるため、当然、一度に少量の木材しか運べないと運送コストが高くなります。このため、優良な丸太でも一定量がまとまらなければコストに見合わず、大量のパルプ材の中に混ぜざるを得ません。また、それほど優良ではないがパルプ材にするには惜しい、というような中間的な丸太も、用途がなければパルプ材として取り扱われている状況にあります。このように、運送コストの面から、パルプ原料には惜しい木材も、パルプ材として供給されている現状があります。

地域内で製材することで、運送距離を最小限に

これまで下川では広葉樹はほとんど製材されていませんでした。しかし、生産された丸太を地域内で製材・乾燥すれば、運送コストを最小限に押さえられ、広葉樹を有効活用することができるのではないか——町の面積の9割が森林で、林業が盛んな下川町だからできる、森の恵みを活かすためのチャレンジです。地域内の製材所なら、少量の広葉樹でも、針葉樹など他の丸太と積み合わせて運ぶことでさらに運送コストを引き下げることができます。森から丸太を生産する造材業者と丸太を挽く製材所の連携で実現した、地域に根ざした新しい木材流通のしくみです。

さまざまな樹種・厚みに対応するための低温乾燥

製材した木材を材料として使用するためには、乾燥の工程が必要です。通常、針葉樹を始めとする木材は、中～高温乾燥機で、同じ樹種・厚みの木材を効率良く乾燥させます。ところが、広葉樹は樹種も豊富で用途も比較的細かく分かれるため、このような乾燥機ではさまざまな樹種・厚みに対応できません。そこで選択した乾燥方法が、低温乾燥です。この方法は、自然に任せて乾燥させる天然乾燥を早めるタイプの乾燥方法で、これならさまざまな樹種・厚みの木材を一度に乾燥させることが可能です。乾燥期間は約1か月と、中～高温乾燥に比べて時間はかかりますが、その分、細胞壁を壊さないため木材本来の色を損ないにくいと評価されています。

「森の都合」に合わせた広葉樹材供給

北海道はかつて、「人間の都合」で次々と広葉樹を伐採し、原始の森のほとんどを失いました。失われた豊かな広葉樹の森が回復するまでには、数百年単位の時間を要します。計画的な育成が難しい広葉樹だからこそ、「森の都合」に合わせた木材流通があってもいい。顔の見える広葉樹材流通の取り組みによって、山村地域が、単なる木材の供給地から消費地である都市とともに価値を生み出す場へと進化することが、衰退を辿る地域に好循環を生み出す人と自然の新しい関係を生む契機にもなるはずです。